

七度の餓死に遇うとも

一度の戦いには遇うな

日々のニュースで報じられる中東をはじめとする「自爆攻撃」に対し、「考えられない。僕はそんなことはしない」と一人の青年が述べた。そこで私は事例を挙げた。「木造船に爆弾を積み戦艦に突っ込む訓練が密かにすすめられていた」こと。「爆弾を抱えて戦車に突っ込む作戦がとられた」こと。そのような事実は昔の話ではない。いまから僅か73年前の日本において、しかも若者の手によって行われたということを書いたことを記憶している。

折も折、NHKラジオ深夜放送の8月9日午前4時からの番組を聞く。そのタイトルは「9回出撃をして生還をした特攻兵士」。その兵士の名は「佐々木友次さん」(当時21歳)である。軍部は、第一回の特攻隊には優秀なパイロットを選んだ。それは特攻の戦略を絶対に成功させる必要があったからである。しかし、この決定に操縦士達は激怒した。それは血の出るような激しい訓練を毎日続けてきた。それが「爆撃ではなく、体当たりをしろ」と言う命令にはパイロットの技術とプライドが許せなかった。佐々木さんの上官であった岩本隊長は「体当た

りはするな、爆弾を落とせ」と。これはあきらかに軍規違反・軍法会議レベルの重罪となる行為である。そして佐々木さんはその言葉を守り爆弾を落として「9回出撃して9回生きて」帰る。しかし、軍司令官は怒った。特攻の戦果はマスコミで大々的に報道され「軍神」としてあがめ、天皇にまで報告されていた。「次は絶対に帰ってくるな!」「今度は爆弾ではなく体当たりで船を沈めろ!」と佐々木さんに死ぬことを求めた。しかし佐々木さんは帰ってくる。守ってくれるはずの岩本隊長はすでに逝っている。仲間達も死んでいる。でも佐々木さんはたった一人帰ってきた。佐々木さんは、戦後故郷の北海道登別で102歳の生涯を終えている。ラジオ番組の出演者である鴻上 尚史氏(作家・演出家)はその秘密をどうしても知りたくよくよく訪ねあてた札幌市内の病院に行く。そして佐々木さんの重い口から次の言葉を引き出した。「自爆死では自分と言うものがなくなる」と心に誓っていた「そして出征の時同級生に「必ず帰ってくる」との言葉を残した。それを守り抜こうと思ったと語っている。

後日談となるがこの特攻を命じた上官は「私もあとに続く」と宣言をしながらも、最後は護衛機に守られて戦線を離脱している。

戦争の狂気を繰り返してはならない

戦争とは「狂気」を生む。前記の「特攻」では4000人の無駄死を強いた。そしてその多くが20歳未満の若者であった。また10数万人の民間人をひと夜で焼き殺した東京大空襲。一瞬にして光と熱と炎の放射線による大量殺傷爆弾の犠牲となった広島、長崎の市民。そして南海の島々では「地上戦はなく、兵士の7割が餓死した」という無残な事実。数え上げれば「キリがない」一つのすべてのが、人間が生み出した「戦争による狂気」であった。

そして終わりに次の記録を報告したい。NHKスペシャル【船乗りたちの戦争】海に消えた6万人の命【を見る。「太平洋戦争の最中、アメリカ軍の襲来を見張る「哨戒」を担うため海軍に徴用された漁師達(通称「黒潮部隊」)は、小さな漁船もろともアメリカ軍による凄まじい射撃に晒され消息を絶ていった。その数は沈没船舶7240隻・死者数6万643人であり、徴用者の中には年齢20歳にも達しない少年の漁師も含まれていた。無謀な戦いの犠牲者たちである。(8月13日放送)

餓死したる 友の袋に一合のコメ

包まれてありたるあわれ「森 誓夫」

帰らざる 17人のほどの兵ありて

静かなる村の一つの嘆き「菅原 俊治」

【昭和万葉集・私の太平洋戦争から】

原発はいらない!!

具体的な事実をもって

明らかにしよう

夏の高校野球の時期である。例年であれば必ずと言ってよいほど「電力ピンチ」が叫ばれ供給制限が検討をされていた。しかし、今年の異常な猛暑の夏。にもかかわらず電力のピンチは報じられず、それどころか「熱中症予防をしつかりと。そのためにはクーラーで冷やして」と国を挙げての啓蒙となっている。もちろん「災害」ともいつておかしくないほどの熱中症による犠牲の多発である。ましてや熱帯夜の連続である。そこで「この猛暑で電気が足りているの?」という疑問が持たれた方が多いと思う。またいぶかるのは当然である。

観測史上最高の猛暑・余裕のある電力

ここに、8月3日付の毎日新聞の記事がある。「猛暑で電気足りるの? 十分な供給力確保省エネや太陽光発電増」という記名付きの記事である。その内容は「北海道、東北、沖縄を除く各電力会社では2011年の東日本大震災以降でピーク時の電力使用が最も大きくなりました。1日のうち最も電力が使われた時間帯の使用電力を「最大電力」と言いますが、東京電力は7月23日午後2〜3時の間、5653万キロワットの最大電力を記録。埼玉県熊谷市で観測史上最高の41.1度を記録した日は昨年8月のピーク(5383万キロワット)を大きく上回った。その時の東電の電力供給能力は6091万キロワットであり全く問題

はなく、仮に電力不足の恐れがあっても他の電力会社に融通してもらおう仕組みも拡充され、政府は「十分な供給力が確保されている」と解説をしている。つまり東電の電力供給量は原発に依存をしなくとも十分であり、政府もそのことを認めている。

東電社長再生エネルギーへの参入表明

それだけではない。東京電力の小早川智明社長は8月16日の記者会見で「太陽光・風力などの再生可能エネルギー事業を強力に推進する」と述べ、「発電量の8割を占める火力に比べると収益は小さいが、太陽光・風力などによる再生エネルギーを本格的に事業化することで将来的に1千億円規模の利益を目指す」と付け加えている。(日経新聞)

とは言え原発事業から撤退をしたわけではない。巨額の投資を続けてきた原発設備の稼働を今後も執拗に追求するだろう。しかし、その方針は今年の猛暑で消し去ることを私たちは暴いていくべきであると提起したい。

電力各社が「でんき予報」なるものを発信しているのを知っているだろうか。これはインターネットで知ることができる。そこで東北電力の「でんき予報」を見る。東北電力は女川原子力発電所1・2号機(宮城県女川町)と東通原発1・2号機(青森県東通村)は今もって再稼働をしていない。よって火力発電の稼働率を高めて電力を補っている。では8月4日(土)・5日(日)の東北六県・新潟エリアの「で

んき予報」はどうなっているかを示したのが次の表である。ピーク時であっても利用率は81%である。そして予備率は23%と余裕の供給量となっている。加えて「本日8月5日(日)の電気の供給は比較的余裕のある見通しです」というコメントが公表されている。

8/4 (土)	予想最大電力 (8/3・18時22分想定)	1.134万kw
	ピーク時供給力	1.397万kw
	使用率	81%
8/5 (日)	予備率	23.2%
	予想最大電力 (8/5・9時22分想定)	1.034万kw
	ピーク時供給力	1.278万kw
	使用率	81%
	予備率	23.6%

【東北六県・新潟エリアのでんき予報】

【8月6日の東電「でんき予報」は次の通り】 利用率のメーターの針は83%を指している



予想最大電力4,576万kW・ピーク時供給力5,490万kW・使用率83%・上記の「でんき予報」の針は83%を指している。【安定供給】

「七年後の配備」

それでも陸上イージスは必要なの？

政府が導入しようとしている「イージス・アショア」ってどんな装備なのだろうか。政府の解説によればイージス艦に搭載されている迎撃ミサイルシステムを陸上配備型にしたものです。政府は昨年12月、北朝鮮の核・ミサイル開発の脅威などを理由に導入を決め、秋田市と山口県萩市にある陸上自衛隊の演習場を候補地に選びました。そして5年後の2023年度の配備を目指しています。

ところが歴史上はじめての米朝首脳会談が開催をされ「朝鮮半島の完全な非核化」を合意され、トランプ米大統領は記者会見で、北朝鮮の金正恩國務委員長が「弾道ミサイル関連の実験場の破壊を約束した」と述べました。

日本政府も米朝首脳会談の歴史的合意を歓迎し、菅義偉官房長官は13日の会見で、「極めて厳しい安全保障の状況がかつてより緩和された」「日本にいつミサイルが向かってくるか分からない状況は明らかになくなった」と認めました。

またハリス次期駐韓米大使は14日の米上院公聴会で、北朝鮮の弾道ミサイルを想定して昨年韓国に配備されたTHAAD（高高度防衛ミサイル）について、北朝鮮の脅威がなくなれば「必要なくなる」と証言しました。

北朝鮮の弾道ミサイルを想定し、2000年代前半から日米韓3カ国が整備を進めてき

た「ミサイル防衛」網そのものが大きな曲がり角にさしかかっていると云えます。

しかし、山口県が「北朝鮮情勢の変化により、配備計画が見直される可能性はあるのか」と質問したのに対し、小野寺防衛相は「我が国を射程に収めるミサイルが依然として多数存在しており、陸上イージスの配備は可及的速やかに取り組みを進める必要がある」と回答しあくまで配備に固執しています。

米国の兵器輸出に手を貸す安倍政権

さてその配備に必要な費用ですが2基で計約4千億円になると防衛省が新たに試算していることが分かりました。当初、防衛省は1基約1千億円と説明してきましたが試算通りなら倍増の膨大な金額です。さらに搭載ミサイルの購入費などを含めると総額で6千億円近くに膨らむ可能性もあることを政府関係者は明らかにしていました。さらに日本政府は2023年度の導入を目指していたが、米側は1基目の配備までに約6年かかるとの見通しであることを示しています。それでは来年度に契約しても7年後の25年度以降にずれ込むことが明確です。なぜ今、導入決定を急ぐのか。結局は北朝鮮の危機を逆手に軍事力の強化を急ぐ安倍政権と、貿易赤字を減らすため米国製の兵器購入を迫るトランプ大統領の要求に手っ取り早く応えられたのが陸上イージスだったと言っても過言ではありません。そして足もとを見られ、安易に米側の言い値

をのまされ青天井で価格が膨れ上がっていく危険があります。

年間1兆7千億ドルが軍事費に使われた

『核保有国は、核兵器の近代化に巨額の資金をつぎ込んでいます。2017年には1兆7千億ドル以上のお金が武器や軍隊のために使われた。これは冷戦終了後、最高の水準だ。世界中の人道援助に必要な金額のおよそ80倍にあたる』（長崎の平和祈念式典・国連事務総長

グテーレス氏の演説より）

では1兆7千億ドルとはどの程度の金額なのでしょう。2017年度各国の年間予算と対比してみます。世界13位のオーストラリアに匹敵するものであり、世界首都圏第一位が東京1兆5200億ドル。一万円札を縦に積んでいって1万メートルの高さ、エベレスト山（8848メートル）を超えるのです。ちなみに「円換算」とするなら約180兆円である。まさに膨大な金額が軍拡に使われています。

そしてまたぞろ「交付金」の支給が提起されている。配備先となった自治体に関しては「部隊展開で迷惑を掛けることもあるので、要望を聞きながら対応する」と言及。防衛施設周辺生活環境整備法に基づく民生安定助成事業を適用し、補助金の交付対象とする可能性を示しました。





核家族化の中で「終活」を考える

新盆を迎えた方、在りし日の故人を偲んでの墓参りなどは多様であるが、多くの方々が墓参りをされたと思う。あの3.11の災害を受けて一時的な避難をされた方、帰らないと心に決め新しい土地で新しい生活を始められた方もいる。そこで残された共通の課題の一つに「墓」をどうするかがある。私は次のような提案をした。「どうだろう。太平洋を目の前にした広大な高台に『双葉地区広域墓地公園』をつくりそこに各災害地のお墓を集める。その際個別の墓をつくるもよし、あるいは宗派は問わない『共同墓』もつくることも考えてよいだろう。もしかしたら「太平洋を散骨の場」としてもよい。各々の終活の考え方はいろいろあつてよい。そして春の彼岸にはお花見、夏は盆踊り、秋は芋煮会などの場として、方々の地から集まり、故郷の誼を深める広場にしてはどうかと言うことであつた。

さて、少子高齢の時代が急速に進んでいる。子どもはその生活基盤を地元ではなく遠隔地に求めても不思議ではない。近距離にあつても親と同居をするケースは少なくなつている。いわゆる核家族の形態が広がっている。そこに「墓の管理」をどうするのが問題となる。

最近、とみに手入れが届かない墓が年々目立つてきている。それだけではない、7年前の

揺れによって倒れた墓石がそのままになつている光景もある。そこに法律に従い菩提寺が「墓を撤去し更地にする」という墓地も目立ってきている。そこで子どもが「墓を移す」などがあり、そこに「墓じまい」が出てくる。墓じまいは勝手にはできない。仏教であればお墓の管理者の菩提寺に「離壇料」(お布施)を収めそして供養をして、お墓の撤去と「お骨」を取り出し移すことの証明書が手渡される。いずれにせよ「墓の管理」が困難になる時代を迎える。家族間の意思疎通を密にしてトラブルが起きないように工夫と努力が必要である。

【合葬墓の問い合わせは

OB・G郡山地区の会事務局へ】

なぜ「田んぼ」は長方形なの？

朝のNHK番組に「こころ旅」がある。66歳の火野正平さんがチャリンコで疾走する番組である。さて道路の左右に広がる稲田が「広い正方形」のものが多いに気づく。そのように考えてみると福島県でも田んぼが「大型」になつていることに気づく。では、田んぼがなぜ長方形なのか。それは長方形で直線が長い方が耕作機械のUターンが少ない利点がある。直線が長い四角形の大型田んぼであれば、むしろ効率が良いことは確かである。

そこで、昔聞いた老婆の話を思い出す。

私の自宅前に老婆がいた。子どもが返ってくる姿を見ると「お帰り」と声をかけ、部屋に招きお菓子を頂いていた。その老婆が話して

くれた「田んぼの長方形」の謂れである。

「田植えの時期になるとあちこちから人が集まる。つまり「日銭稼ぎ」である。そして苗束をもつて一斉に植え方が始まる。その先の畔には『どぶろく』の入った一升瓶がたつている。『男めら』はそれを飲みたくて手を早める。おらたちは『どぶろく』などはいらない。だれど引つ張られてつい手を早めてしまった」と。地主はできるだけ長い長方形の田んぼにする。老婆はそのことには触れなかったが、長方形の田を見ると老婆の姿を思い出す。

今は機械化が進みこれからは田も大型になつていくだろう。「日銭稼ぎ」も「畔のどぶろく」も死語となつてしまつたが、よくよく考えてみると今でも「どぶろく」が存在をしている。社会の事態に気づく。競争によつて人が傷つき、傷つかせる社会をなくしたいものである。

秋田「金足農校」に大きな拍手を!!

全国高校野球選手権大会の決勝戦は、大阪桐蔭校に軍配が上がつた。しかし、優勝は逃したとはいえ金足農校は高校野球のあるべき姿に一石を投じたものと言える。それは全員が地元秋田の出身であり、終始9人オール戦というぎりぎりの選手層の中で戦い抜いたところにある。勝てるチームづくりを方針に全国から集める「特待生重視の構成」の私立高校に対する戦いは、100年記念にふさわしいものとして後世に残るものと確信をする。